ました。この雑誌は、平成元年の現在でも、約七十年間発行され続け全国的にもめずらしいといわれています。

園主より身は芽牡丹の奴かな　　昭和十一年作

この句は胸像の台座にきざまれています。「人は私のことを、牡丹園の園主などとよぶが、そんなにおごりたかぶった気持ちにはなれない。愛らしい芽牡丹に心からつかえているものであると思っている」という意味です。この句には、破籠子のけんきょな人がらがよく表われている名句です。

天八月市に牡丹を売らんとす　　昭和四年作

八月というと暑い盛りであります。この暑さの中で心をこめて育てた、牡丹のなえを売ろうとしているのです。源太郎としては、どの牡丹にも愛情をそそいでいたのですから、牡丹のなえを売ることは、たいへんつらいことであったでしょう。それでもけいざい上の理由で、どうしても売らなければならないという、気持ちがよく表われている名句です。